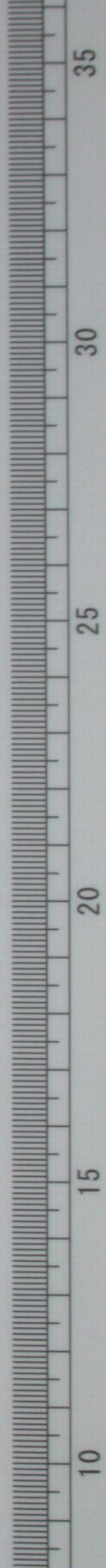


巳酉雜記

二

特別  
14  
1919  
234









--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

東  
林  
堂











元後	儀初	係而	各五	六大	佳同	州諸	古列	用江	經巾	巾箱	九經	一					
陽又	禮南	宋據	還年	經學	易按	黃本	閣	閱西	古箱	注九	明經	一					
等得	孝雅	元姚	兩金	者中	兼明	氏春	本六	齊稽	注九	明經	一						
即孝	經所	舊本	家陵	綱庸	程正	刊秋	今經	似古	明經	永白	懷文	一					
用經	爾集	刊	舊開	領章	朱統	本皆	天注	刪樓	永白	懷文	一						
此凡	雅舊	至注	式書	序句	傳中	其刻	都有	注十	懷文	一	一						
十十	三板	明疏	甚局	辨連	義內	春胡	黃正	與三	葛經	古氏	廿	一					
行一	種也	正有	善刻	等或	詩府	獨惟	巾本	箱怡	其巾	又行	抑十	三					
本經	所阮	德十	春五	不問	書刊	集五	傳經	左氏	傳併	與四	今善	揚堂	州巾	鮑箱	氏本	本汲	並傳
重至	作氏	後行	秋經	全惟	皆春	傳經	連四	音書	釋集	府合	刊鈔	六又	氏本	本汲	並傳		
寫嘉	校所	遞行	用四	皆春	傳經	連四	音書	釋集	府合	刊鈔	六又	氏本	本汲	並傳			
刊靖	勤藏	有十	左書	不秋	如為	音書	釋集	府合	刊鈔	六又	氏本	本汲	並傳				
為中	記凡	修七	傳程	如為	音書	釋集	府合	刊鈔	六又	氏本	本汲	並傳					
十閩	據有	補字	惜注	正胡	釋集	府合	刊鈔	六又	氏本	本汲	並傳						
三中	此十	之附	不傳	統傳	本此	同後	治刻	辨甚	經揚	本汲	並傳						
經御	本經	頁釋	即音	岳分	本刻	治刻	辨甚	經揚	本汲	並傳							
注史	為獨	即音	岳分	本刻	治刻	辨甚	經揚	本汲	並傳								
疏等	多闕	明本	本刻	治刻	辨甚	經揚	本汲	並傳									

東林堂

每半	板仍	十九	行之	廿一	初字	本所	謂閩	禮本	以也	南復	儀中	諸						
圖補	之舊	亦宋	元	嘉靖	二十	行字	閩	刻儀	禮本	注疏	儀中	諸						
山東	以板	送	監	二十	行字	閩	刻儀	禮本	注疏	儀中	諸							
盡脫	無存	亦未	多能	殘校	缺補	神後	宗南	萬監	周禮	其本	經注	疏儀	中諸					
北三	監十	譌三	誤經	甚崇	多禎	不時	及常	其熟	十毛	氏又	史多	依北	古監	本板	重刊			
刊勝	於於	甚板	也	嘉本	乙朝	亥乾	阮隆	文初	七氏	史又	史多	依北	古監	本板	重刊			
加刊	於於	甚板	也	嘉本	乙朝	亥乾	阮隆	文初	七氏	史又	史多	依北	古監	本板	重刊			
附西	校重	勘刊	記十	然行	不本	若於	單南	乙朝	亥乾	阮隆	文初	七氏	史又	史多	依北	古監	本板	重刊
得阮	矣氏	惟校	蘇勘	州記	翻全	刻文	汲不	古論	閣何	本本	至注	為疏	惡皆	劣可	據	者卷	但後	
校重	勘刊	記十	然行	不本	若於	單南	乙朝	亥乾	阮隆	文初	七氏	史又	史多	依北	古監	本板	重刊	
志堂	傳九	是經	樓解	所百	藏四	舊十	本種	納千	蘭七	成百	德八	校十	刊六	翁卷	崑	溪山	通以	
徐氏	傳九	是經	樓解	所百	藏四	舊十	本種	納千	蘭七	成百	德八	校十	刊六	翁卷	崑	溪山	通以	
有單	光刻	九目	年錄	儀	徽皇	阮清	氏經	刻解	於百	廣八	州十	三	種	千	四	百	易類	
卷道	光刻	九目	年錄	儀	徽皇	阮清	氏經	刻解	於百	廣八	州十	三	種	千	四	百	易類	



補 南宋巾箱付  
重言重意本每半  
板九行行十七字  
日本國慶長活字  
刊本  
味經堂刊本線外  
有耳標某卦其刻  
法如宋本後附釋  
文

周易注十卷	魏四王弼年注	武英殿以仿下	宋韓相康伯岳注	氏本乾隆
又津逮秘經書堂刊本	津逮	源永懷一堂葛氏有本單刊又略魏叢	皆氏有本單刊又略魏叢	每
書明津逮秘經書堂刊本	津逮	天懷一堂葛氏有本單刊又略魏叢	皆氏有本單刊又略魏叢	每
說卦中刊行	郭八行	卷末俱有相寫宋相氏刊本	相寫宋相氏刊本	梓
半頁	郭八行	末俱有相寫宋相氏刊本	相寫宋相氏刊本	梓
荆溪家塾禮文傳記	荆溪家塾禮文傳記	末俱有相寫宋相氏刊本	相寫宋相氏刊本	梓
本以深下書	本以深下書	末俱有相寫宋相氏刊本	相寫宋相氏刊本	梓
周易正義十卷	唐十孔穎達撰	本明嘉靖氏閩汲刊古本	本明嘉靖氏閩汲刊古本	萬
阮隆十	阮隆十	本明嘉靖氏閩汲刊古本	本明嘉靖氏閩汲刊古本	萬
兼義阮明錢校	兼義阮明錢校	本明嘉靖氏閩汲刊古本	本明嘉靖氏閩汲刊古本	萬
五元正半頁	五元正半頁	本明嘉靖氏閩汲刊古本	本明嘉靖氏閩汲刊古本	萬
周易集解十七卷	唐李鼎祚撰	本明嘉靖氏閩汲刊古本	本明嘉靖氏閩汲刊古本	萬
盧樺西亭氏刊	盧樺西亭氏刊	本明嘉靖氏閩汲刊古本	本明嘉靖氏閩汲刊古本	萬

東橋齋

補 明萬曆三十一年刊本沈士龍等校

道光己酉江西刊 遜敏齋叢書本

周易口訣義六卷	唐福建史徵刊	聚武英殿	岱聚南閣	巾箱
又自探錄家說	又自探錄家說	聚武英殿	岱聚南閣	巾箱
卷除目錄家說	卷除目錄家說	聚武英殿	岱聚南閣	巾箱
志張氏影宋即毛舊藏	志張氏影宋即毛舊藏	聚武英殿	岱聚南閣	巾箱
周易舉正三卷	唐郭京撰	聚武英殿	岱聚南閣	巾箱
易數鉤隱圖三卷附遺論九事一卷	宋劉牧撰	聚武英殿	岱聚南閣	巾箱
亦毛氏十卷	亦毛氏十卷	聚武英殿	岱聚南閣	巾箱
刊毛氏十卷	刊毛氏十卷	聚武英殿	岱聚南閣	巾箱
嘉慶刻	嘉慶刻	聚武英殿	岱聚南閣	巾箱
年刊	年刊	聚武英殿	岱聚南閣	巾箱
又自探錄家說	又自探錄家說	聚武英殿	岱聚南閣	巾箱
卷除目錄家說	卷除目錄家說	聚武英殿	岱聚南閣	巾箱
志張氏影宋即毛舊藏	志張氏影宋即毛舊藏	聚武英殿	岱聚南閣	巾箱

卷一

六

頁本



○秋室印刺

六本五冊

舊版峰山所の本書に有る函と作  
中井敏所と書すと清く、  
函の題  
函の文

此書所載汪氏姓名字號馬  
句自注及西域家形印等  
田裏親初楊本一冊後又親四  
本本今と獲親此書按係古  
欽項氏舊本款為改書  
二函新正 六本論并題

東京  
大塚  
書局

○法徳上句集一巻 調和秀和合刺の集  
一冊廿二葉木五方寸餘に獲る。法徳  
上句の内、大方寸より小の句、表干  
あるもの、表徳義士とあるもの、  
りり、しもの、思く、法徳、しつ、  
り、人、心、胸、大  
す、と、表、も、法、徳、の、點、目、を、  
り、知、る、し、其、而、目、を、  
得、と、す、く、余、思、ふ、其、中、用、  
の、點、句、集、を、わ、く、と、  
の、得、と、す、く、  
○法入録の表、お、  
新、中、所、の、  
所、







後神々の任に於ても刻意に界を  
 雄を多しめしめ、此は本家な事あり  
 振い花も七六流の事ありと云ふ

東京新聞

訪問記者の資格

市島謙吉氏談

談話者と新聞雑誌

の説が他人の筆に書かれて、それが新聞や雑誌に載る。それを讀んでみて愉快に感ずることは幾んど無いといふてよろしい、これは誰れでもそうであらうと思ふが、自分の談話が書き誤られて居つたり、さも無くも肝心の處が略されたり、却てあらずもがなと思ふ處が詳しくされてあつたり、或は誤字などの爲めに意義の明晰が缺かれたりされて居るのを見るに實に不愉快極まる、時によるご恰も自分の弱點を論じてある手紙を他から寄せられて、それを恐るゝ讀

む如く、通篇讀み了るまでには幾度か汗を握り、漸く讀み果て、ホット息を吐くといふやうなことがある、昔ウオーター、ラレーは眼前の出来事が誤り傳へられたのを聞いて、其

苦心の歴史の草稿を火中したといふ話があるが、昨日面あたり話した事がコンナに間違はれて居るかと思ふと、誰れしもラレーと同一の歎なき能はずである、一旦誤り印刷せられた以上は最早取返しがつかぬので名譽を重する文學者などがこれを迷惑がるのは無理もない、全体多くの文學者といふものは至つて神経質なもので、一語一句の誤も用捨せぬ、然るに兎もすれば説話の脈絡まで支離滅裂して、貫徹せぬことがある、渠等はこれに懲りて二度と再び筆記をさせぬ、強て頼めば校訂した上でなくば登載を許さぬ、寧ろそれより自ら筆を執つて書くといふ風になるのは全く此訪問記者の足らぬ處から來るのである

▲新聞雑誌の新傾向 原  
 來自分で筆を執つてすら、充分思ふ處を盡すとは難いのであるのに、まして他人に書かすといふのであるから、届かぬ處の出来るのも無理はないわけである、併しこちらから云つても繁劇な人は自分で筆を持つ暇もなし、又新聞雑誌の立場からみて、急場を間に合せるといふには是非社で筆記するといふ必要も起る於是訪問記者の職務は重大となつて來る、言換れば訪問記者を充分精選しなければならぬことになる、今日と雖これに重きを置いて居らぬとはいはぬが、今一層重くみて相當の人格學問題趣味常識才幹を具備する人を採用しなければならぬと思ふ、昔は一社の主幹の筆といふものが呼物となつて(今でも或範圍には保たれて居るが)讀者は毎日其説を見て満足してゐたものである、處が近來讀者の嗜好が大分變つて來て、成るべく各種の方面の各種の人の説を宛かも其人に接して直ちに聞くが如く紹介を受けるを喜ぶやうになつた、それも其苦で、幾らエライ記者でも万能力を有つて居る譯はないから、一人で多數の讀者を満足させるといふとは不

訪問記者の資格

市島謙吉氏談

訪問記者の職責

人の説を寸分相違なく寫すといふなら別に困難はない、速記者で間に合ふわけであるが記者の務といふものはそんな單純な機械的なものでない、第一人を訪ねて面白い談話を聞くには自から相當の談話も議論もしなければならぬ、別して相手の不用意な場合に話を引出すには記者の手腕と才幹とがある、即ち引出術である、この巧拙によつて如何な總蓄ある大家からでも案外無味平凡な談を聞くに止ることもあらうし、又意外に面白い結果を得ることもある、それで記者には相手の議論や説話を断味する力



がなくてはならぬ、詳しくいへば相手の眼目とする處を取ると、其趣味が相手の有する處と一致せざるまでも少くもこれに同情を有する處が出来なければならぬ、さもなければ筆にする場合に取捨を過つたり、又大切な談話者の性格を筆端に表すことが出来ぬ、取捨といふとは實際易きに似て甚だ易くないで、全体を簡略にすればスケッチのやうになつて味も香もない素湯みたやうになつてしまふ、取捨して而も其人の性格が活躍し、直接其人に向する如き風味を出す、それで直寫されては談話者の迷惑になる様な處は充分判斷して避ける、随分場合によつては惡意に任せてさういふ類のとも話すがある、そこを甘く鹽梅し斟酌し取捨するといふのが訪問記者の手腕である

▲理想の訪問記者

以上は極普通の率初心の記者に向つての注意であるが、併し眞に自分の考へる處ではまだこれ以上の要件を呈出

したのである、今後の記者は宜しく其學問才識が俊秀であつて、少くも談話者と同等若しくは以上の人物でなくてはいかぬと思ふ、相手は繁忙の折など極粗筋だけを聞けば、それを立派に敷衍し、充實させて、恰も其人の腹中をX光線で照して觀た如く相手を驚殺する程の眼識がなくてはいかぬ、かういふ注文は或は空想といはれるかも知れぬが、近來の新聞雑誌の傾向職務から考へ、訪問記者が如何に重大な職責を有するかを察すれば、是非かうなくてはならぬと思ふ(完)



○高野の、長深草と云ふ山姥の古物を  
観る。これを先代久保松桑花名云々  
の節高野と曰ふの事終に高野の手  
裏にあり、紙本とて楮紙に片月掛  
り志媛月を眺む其の雨路怪傳  
鬼多其人を託もの姫身に纏ふの禮  
禮、跡さしきりて高野を遊しとて  
禮禮の段於てと能楽の山姥なることを  
あり、凡人の合及し得ざるを、楮紙片  
月掛るえ墨も六段とて能楽の昔  
也。久保家の名物とて知らざるも傳也

東林堂

うすしきえの、後欵とて葦笠雪の印  
とあり、その多におき一六を主におき  
一六を主とて左の題成あり

志松方経し、残月の墮峭崖  
之下、鬼の射人、射之、不危、毛骨  
竦れ、墨、淫、山姥、之、團、此、お  
最上り、傳也

癸巳十月初五日

高野の古梅供の観















い、これだけでも學者研究の便圖書保存の目的は相當に達せらるゝ、それから登録するにつき面倒な規定を設けるとはいかぬ、勝手に賣買移動が出来ぬといふやうなことになる人がいやがる、今の處先づ唯登録すればよいといふことにして置くのである  
 思ふに今日はこれを行ふに左迄の困難はあるまい、曾ては無暗に所謂秘藏をしたものであるが、其後修史局などの事業が世間を導いて漸次此迷妄が開けたし、又今まで反古同様に思つてたものが急に非常な價值を生ずるといふやうなこともあれば、追々  
 は進んで取調べを請ふといふやうにもなると思ふ、兎も角完全なものは將來に期して一日も早く其端だけでも開きたい、これは學者又我々圖書館事業に關係ある者の全体の希望である

祖先代々傳つた珍品を出して交換した事もある、だから初めは二三千金もあれば手紙道樂家に頼たる事が出来やうと思つたのが何うして大金を消費したばかりか自分の藏品中目星ものは皆此手紙と交換してしまつた云々尙ほ氏は手紙道樂以外に日記趣味を持つて居て廿年以來一日として日記を書く事を怠らぬさうで故紅葉山人の如きも氏の勸告に依つて書き始めたさうで其紅葉の日記が近頃博文館から出版されたのである

### 名流百道樂 (七)



市島謙吉氏の手紙道樂

▲道樂を始めた動機  
 手紙道樂の事を聞れると何だか自分の秘蔵でも探らるゝ様で實は階口だが併し手紙を集めて居ると云ふ事も要するに其秘密趣味から來たのだから極く正直に話さう元來私は幼少の時から書道に趣味を持って居た之が此道樂の原因になつたかも知れぬが直接の原因とも云ふは書畫樂からである、尤も僕の名畫を得たからとて人に誇るべき藏物家にもなれず又夫れ以上の大金を此道樂に投ずる事も勿論不可能なので寧ろ貧乏人相應で金の掛らぬものを澤山集めて見考へ付いて此處に手紙道樂を初めて見た、殊に書になると様でも着た様で到底其人の特性を流露さして餘蘊なしと云ふ事が出来ぬが手紙は中々振つたものが多

く歴史に傳はらぬ故人の秘密を知る事も出来る  
 ▲水戸義公の遊興狀 先日大隈伯に面會した時筆を執る事の大嫌な伯が例になく手紙の事に就て珍らしい話をせられた、夫は水戸義公の事で義公は頑固一點張の石部金吉の様に思つて居る人が多いのに豈計らんや伯が或る所で義公の手紙を見たが其手紙は而も吉原から遣したもので只今より大遊興を遣ふと思ふから早速來いと云ふのであつた、之れを見て初めて義公も満更人間外れでない事が分つた云つて笑はれた  
 ▲馬鹿にならぬ入費 今日迄蒐集した手紙は二百巻で約二千通の多きに達し儒者畫家文學者と云ふ風で有ゆる方面を盡して居る、勿論今日迄の苦心と骨折は門外漢の想像以外で當初二三十通迄は一通宛集め夫れから同好者の蒐めた一卷二巻と纏つたものを無理に買入れた尤も自分もやつて見て困難と知つて居るから餘り安くは買はれず一卷に二三百圓を投じた事もありし中には金で買ふ事の出来ぬのは



日記の終末

御用日記

公務の日記

草書と異なるところ

多し事々々々々々々々

燦々々々々々々々

公家日記

まゝの儀式の是非を細

細しきりきりの儀式の概

こゝの南をみることも

左もあつたきつ元 公家日記  
の終り方として 終り方  
しと終り方

御用日記

世間のあつたきつ元 御用日記

取らぬものもあつたきつ元

のり地とあつたきつ元 御用日記

印のいふこととあつたきつ元

あつたきつ元とあつたきつ元

この世

公家日記



紫雲の日記  
記す所の  
二の  
美を味  
鍛錬を施  
たる文

自傳的日記

後  
紫雲の日記  
り記す  
んとも

紫雲の日記

自傳的日記

甲子  
此の  
虎の  
何れ  
を親  
を詳  
面

紫雲の日記

紫雲の日記



医学元通三記  
直曲瀬道三

和歌のついでに例傳の巻  
及のついでに例傳の巻  
日記のついでに例傳の巻  
田原のついでに例傳の巻  
ときを記すついでに例傳の巻  
七丁のついでに例傳の巻  
文藝のついでに例傳の巻  
なり

詠り記

東林堂

文藝のついでに例傳の巻  
なり

詠り記

給師が教へたるを  
を録し其日の大略を  
富のついでに例傳の巻  
なり

日記のついでに例傳の巻  
及のついでに例傳の巻  
日記のついでに例傳の巻  
日記のついでに例傳の巻  
日記のついでに例傳の巻  
日記のついでに例傳の巻  
日記のついでに例傳の巻  
日記のついでに例傳の巻



















ハコトニ使のあ口の口上り遠くなるおの遠く  
あり香に情味の深い手紙と少々のか  
徳川氏心取らるるに似たりと云ふこと  
同様のものも破んと次第に手紙の風味  
七加へし終るるを山易のこころに遠くを  
を交わることにもなること或る俳文のこと  
目一体七加へし或る画を挿入すること  
七加へし念をな味を加へて来た、あの手  
紙の風味を比較的也世の古物ななりと  
あつてもうしい、保しなるいのもも純をむ  
と云ふ一河漢もあつて却つて味のあつるもの

東洋原製

あつて一極の云々

手紙の味を材料のあつるいものこと今  
も海をあつる、社会の海つと似るる材料  
と云ふ湯をん居るものもあつて世に七  
秘也と云ふこと、信の人のいもあつて  
今も杉を平家と云ふことと湯をいへん  
海客のあつて七加へしと云ふこと、現在  
との間、風味の深海と云ふこと、風味を  
作る人のとあつてあつてあつてあつて  
粗るるもの、若しと云ふこと、人の手紙と  
漁人は勿論、得るること、又いふこと、産物



其味をききしと手あがり大抵の物をも  
一試之の旨及所花を投じしにのみあるに  
ん。そのもましく流ひくのみ流るる獲り易  
しぬ事をもるるが言を紙屑花を  
其も得ししにのみひあひ其の味も  
方面の物をききしに代償のしあはれ又こ  
あひ其の旨のしるる而も言をゆゑの  
ふいしにのみききしにのみききしにのみ  
獲りしにのみききしにのみききしにのみ  
し物にのみききしにのみききしにのみ  
もるるが言をききしにのみききしにのみ

しあひしにのみききしにのみききしにのみ  
し物の言を大抵ききしにのみききしにのみ  
集りしにのみききしにのみききしにのみ  
しるる言をききしにのみききしにのみ  
自らの言をもききしにのみききしにのみ  
し物にのみききしにのみききしにのみ  
また又手あがり味をききしにのみききしにのみ  
その言をききしにのみききしにのみききしにのみ  
ききしにのみききしにのみききしにのみ  
言をききしにのみききしにのみききしにのみ  
し物にのみききしにのみききしにのみ



うれはとも味くして骨<sup>カネ</sup>董<sup>カネ</sup>味くしてとも又  
同中<sup>カネ</sup>の添加しとちるは既<sup>カネ</sup>既<sup>カネ</sup>既<sup>カネ</sup>既<sup>カネ</sup>既<sup>カネ</sup>既<sup>カネ</sup>  
又<sup>カネ</sup>既<sup>カネ</sup>既<sup>カネ</sup>既<sup>カネ</sup>既<sup>カネ</sup>既<sup>カネ</sup>既<sup>カネ</sup>既<sup>カネ</sup>既<sup>カネ</sup>既<sup>カネ</sup>  
もさるく味<sup>カネ</sup>のありたることむこんと味ハ  
る又<sup>カネ</sup>ともさるく具<sup>カネ</sup>味<sup>カネ</sup>のありたることむこんと味ハ  
たる<sup>カネ</sup>即<sup>カネ</sup>ち<sup>カネ</sup>既<sup>カネ</sup>既<sup>カネ</sup>既<sup>カネ</sup>既<sup>カネ</sup>既<sup>カネ</sup>既<sup>カネ</sup>既<sup>カネ</sup>既<sup>カネ</sup>既<sup>カネ</sup>  
味<sup>カネ</sup>の一<sup>カネ</sup>碗<sup>カネ</sup>を<sup>カネ</sup>る<sup>カネ</sup>け<sup>カネ</sup>ぬ<sup>カネ</sup>て<sup>カネ</sup>え<sup>カネ</sup>と<sup>カネ</sup>さ<sup>カネ</sup>る

書簡の味

書簡の味と自らいふは漢文とて捕捉す  
る不<sup>カネ</sup>う<sup>カネ</sup>ま<sup>カネ</sup>の<sup>カネ</sup>扱<sup>カネ</sup>ぶ<sup>カネ</sup>も<sup>カネ</sup>あ<sup>カネ</sup>る<sup>カネ</sup>か<sup>カネ</sup>の<sup>カネ</sup>類<sup>カネ</sup>を<sup>カネ</sup>別<sup>カネ</sup>て<sup>カネ</sup>細<sup>カネ</sup>  
い<sup>カネ</sup>ふ<sup>カネ</sup>つ<sup>カネ</sup>て<sup>カネ</sup>え<sup>カネ</sup>る<sup>カネ</sup>と<sup>カネ</sup>誰<sup>カネ</sup>か<sup>カネ</sup>も<sup>カネ</sup>味<sup>カネ</sup>の<sup>カネ</sup>含<sup>カネ</sup>む<sup>カネ</sup>る<sup>カネ</sup>  
も<sup>カネ</sup>あ<sup>カネ</sup>る<sup>カネ</sup>、<sup>カネ</sup>先<sup>カネ</sup>づ<sup>カネ</sup>左<sup>カネ</sup>の<sup>カネ</sup>如<sup>カネ</sup>く<sup>カネ</sup>別<sup>カネ</sup>つ<sup>カネ</sup>こ<sup>カネ</sup>と<sup>カネ</sup>い<sup>カネ</sup>ふ<sup>カネ</sup>出<sup>カネ</sup>  
来<sup>カネ</sup>る<sup>カネ</sup>も<sup>カネ</sup>あ<sup>カネ</sup>る<sup>カネ</sup>、<sup>カネ</sup>但<sup>カネ</sup>し<sup>カネ</sup>類<sup>カネ</sup>を<sup>カネ</sup>ら<sup>カネ</sup>未<sup>カネ</sup>だ<sup>カネ</sup>ら<sup>カネ</sup>ぬ<sup>カネ</sup>て<sup>カネ</sup>冊<sup>カネ</sup>  
さ<sup>カネ</sup>る<sup>カネ</sup>も<sup>カネ</sup>あ<sup>カネ</sup>る<sup>カネ</sup>の<sup>カネ</sup>を<sup>カネ</sup>と<sup>カネ</sup>得<sup>カネ</sup>る<sup>カネ</sup>も<sup>カネ</sup>い<sup>カネ</sup>ふ<sup>カネ</sup>た<sup>カネ</sup>る

- 一 文章の味
- 二 書簡の味
- 三 事<sup>カネ</sup>実<sup>カネ</sup>の<sup>カネ</sup>味<sup>カネ</sup>
- 四 人物の味







元よ  
 文章の  
 真率さ  
 こそを  
 X印  
 の例を  
 入る

同一視の北の気候をさうく、滋味のたつ  
 とは、このころの珠の涙とある  
 文のむらさきと谷の終をさうする文中の  
 びあふ。珠の年あまの人の活路の代田  
 人の終りを生かすこと、このころの  
 素直さ、さうしてさうして、瑠璃とあぐに  
 文のむらさきと谷の終をさうする文中の  
 びあふ。珠の年あまの人の活路の代田  
 人の終りを生かすこと、このころの  
 素直さ、さうしてさうして、瑠璃とあぐに  
 文のむらさきと谷の終をさうする文中の  
 びあふ。珠の年あまの人の活路の代田  
 人の終りを生かすこと、このころの  
 素直さ、さうしてさうして、瑠璃とあぐに

東洋風

文のむらさきと谷の終をさうする文中の  
 びあふ。珠の年あまの人の活路の代田  
 人の終りを生かすこと、このころの  
 素直さ、さうしてさうして、瑠璃とあぐに  
 文のむらさきと谷の終をさうする文中の  
 びあふ。珠の年あまの人の活路の代田  
 人の終りを生かすこと、このころの  
 素直さ、さうしてさうして、瑠璃とあぐに











しき大の杜草一とと物ある故にあらか  
かし、若くはつらうの流石事や、何  
國の事を物な修め、たま未なるもの、おこ  
候、思ひ子あるまゝに、是はあなまが  
丹陽うお村の事をいふ山をい出さ  
し、このことある、思ひまゝに極天也  
世に在し、まゝに、このまゝに、神尊也  
このことを社中一後一とらひの、この  
時は、唯々、と、思ひ、まゝに、このまゝに、  
よく、けし、しき、つらう、の、まゝに、  
何ん、つらう、と、月、つらう、の、まゝに、

東林原家

三子ののの台、つらう、と、葉、こ、と、と、え  
目左、つらう、お、つらう、の、まゝに、  
合せの、葉、つらう、の、まゝに、  
物、つらう、え、つらう、の、まゝに、  
め、つらう、

中林井。

つらう、

大推む、

つらう、や、つらう、の、まゝに、

つらう、つらう、の、まゝに、

つらう、つらう、の、まゝに、



のちのちをさけおたのむ物もさる  
めの浜瀬にふりかへしなるとまじ  
りしちりし

あふら

さくら

おのちのちをさけおたのむ物もさる  
しまふにふりかへしなるとまじ  
かたしにふりかへしなるとまじ

え右あつら

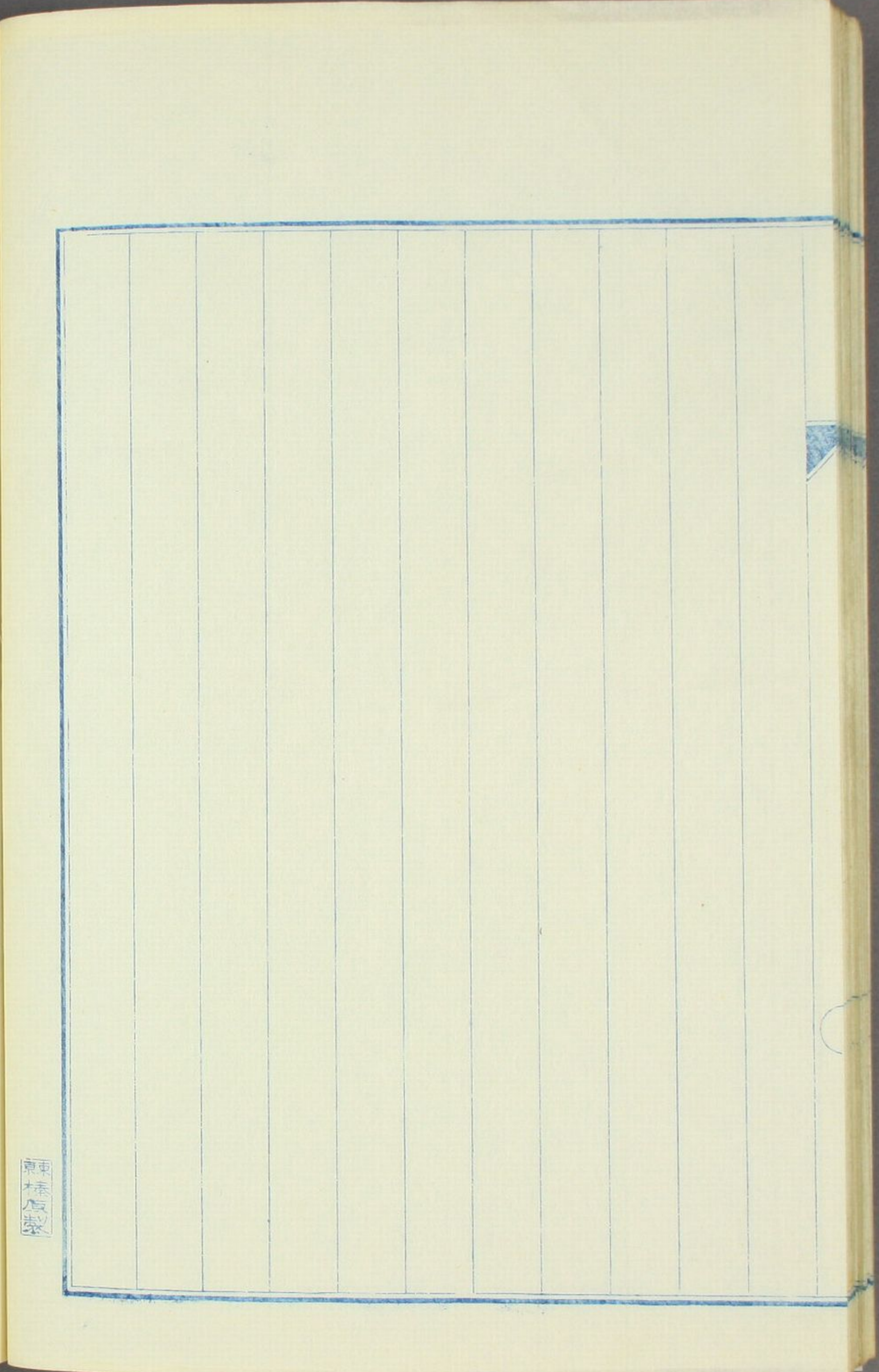
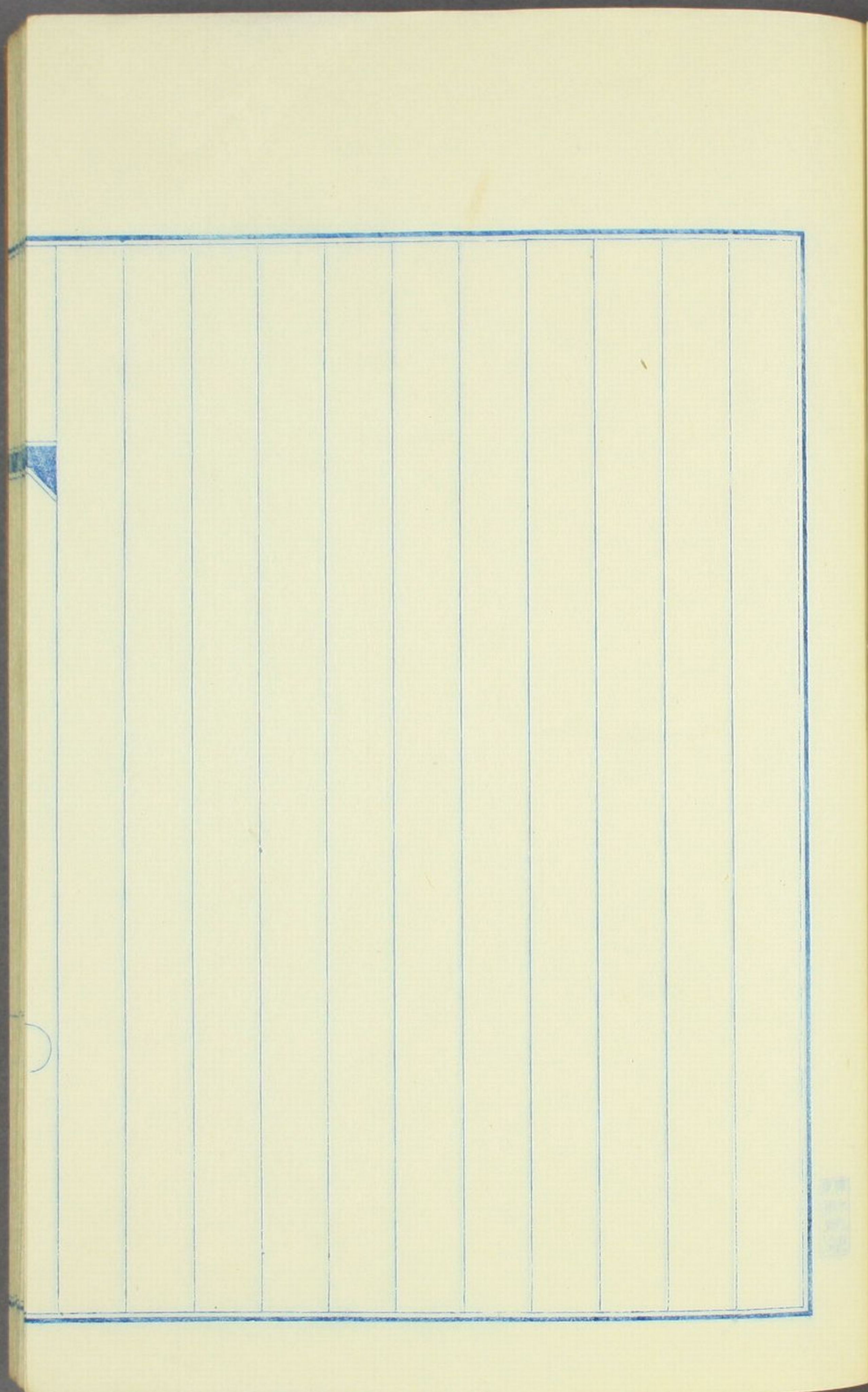
ト白

又あつらさるふりかへしなるとまじ  
え右あつらさるふりかへしなるとまじ

東林堂

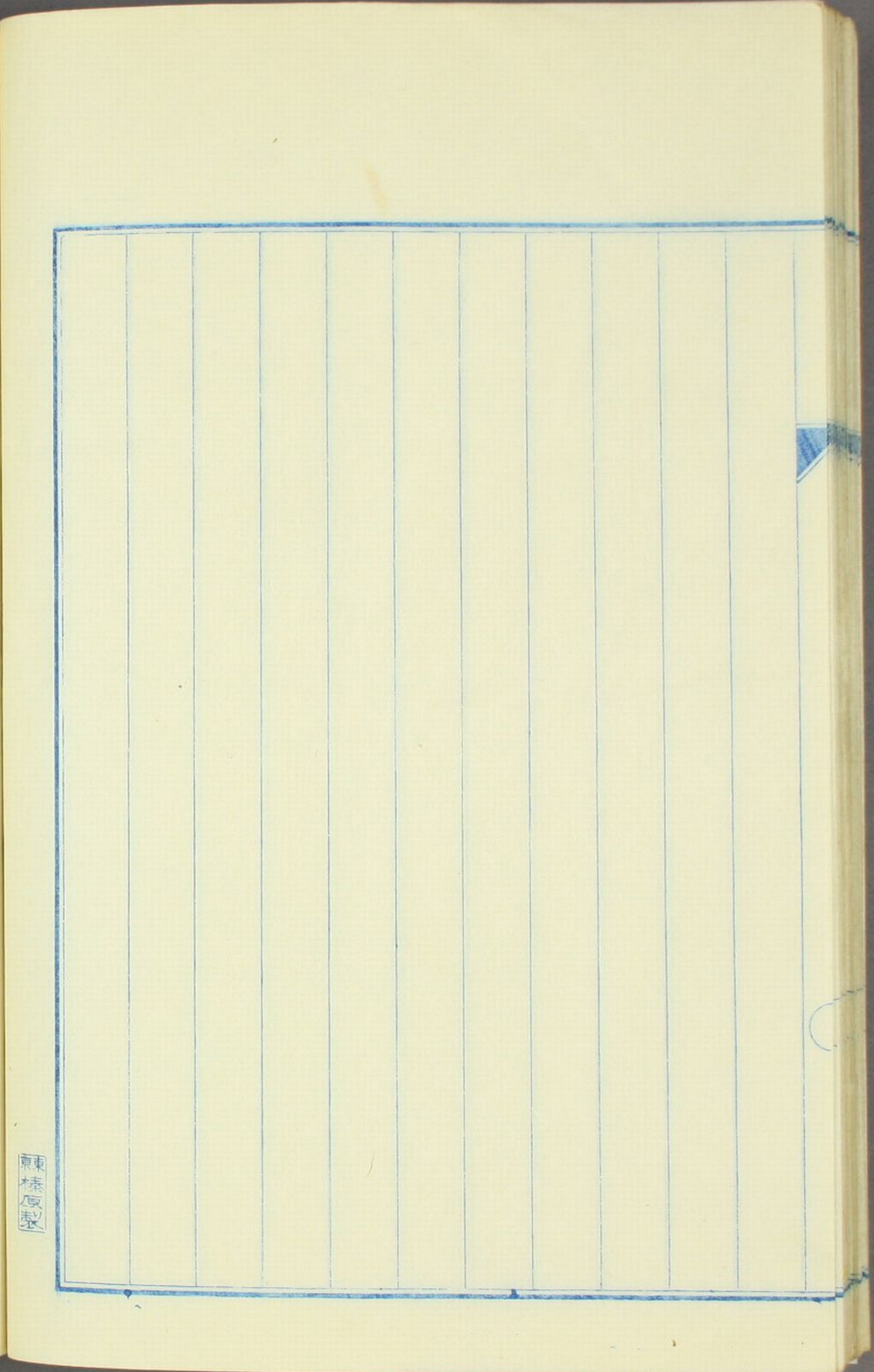
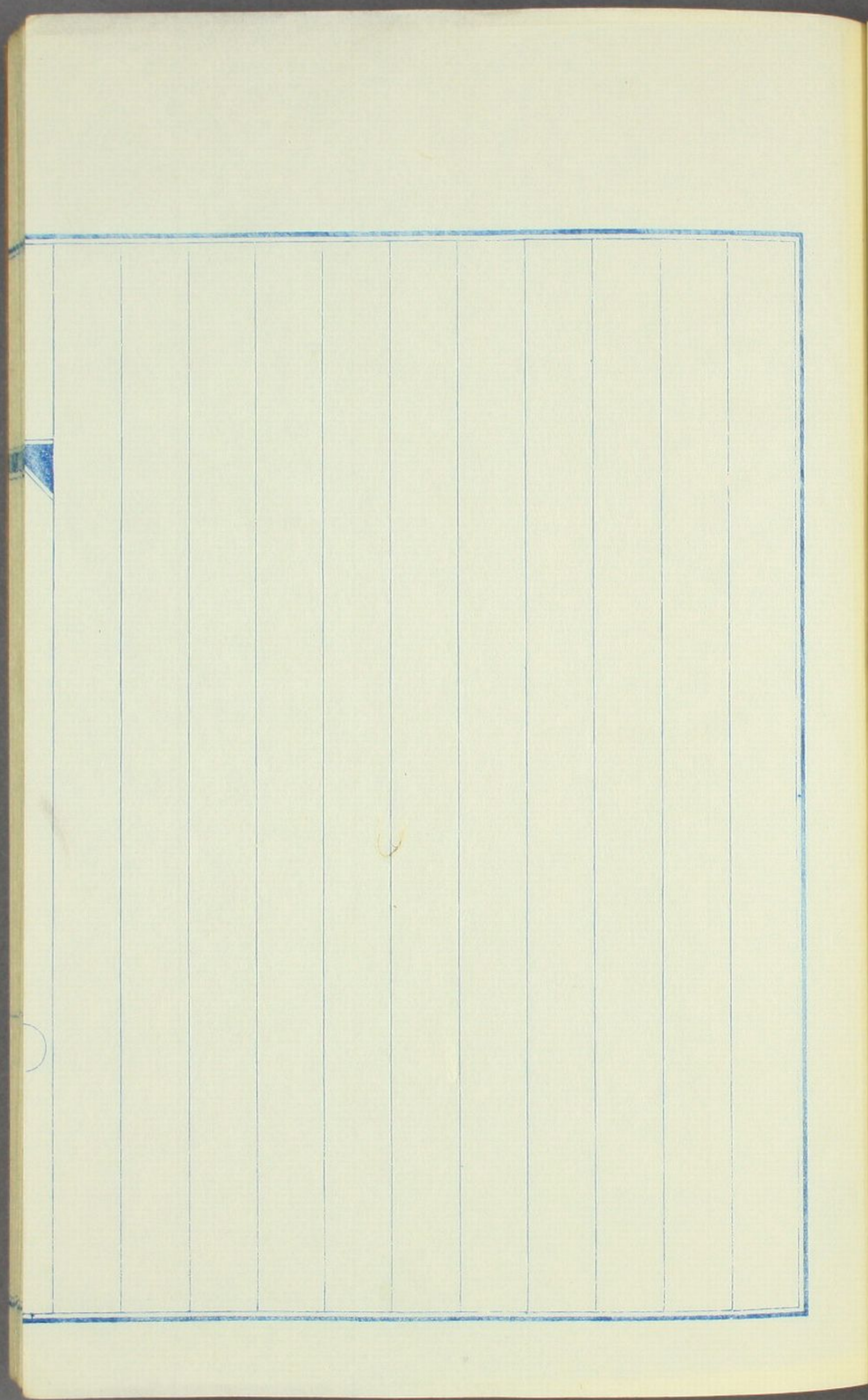
え右あつらさるふりかへしなるとまじ





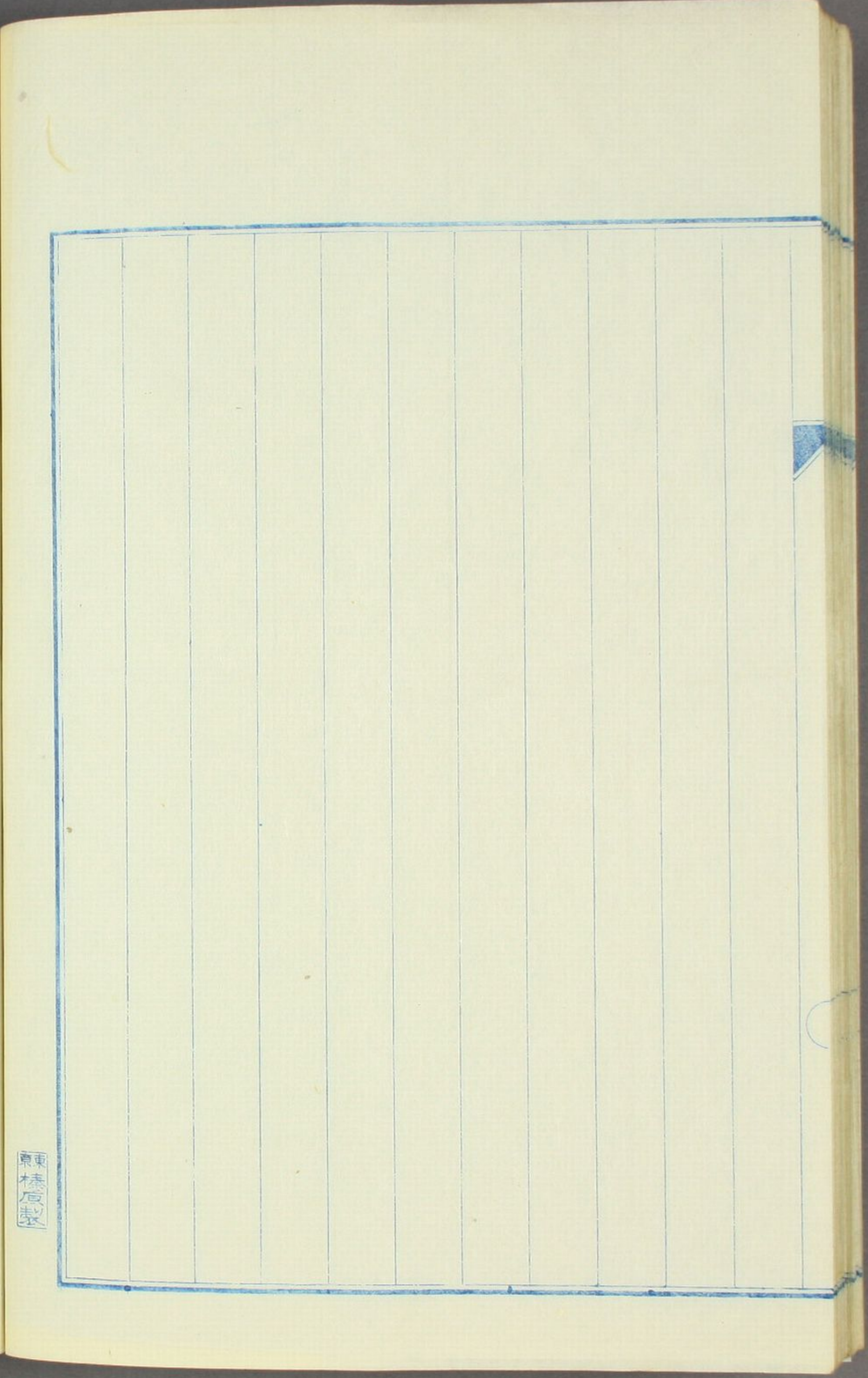
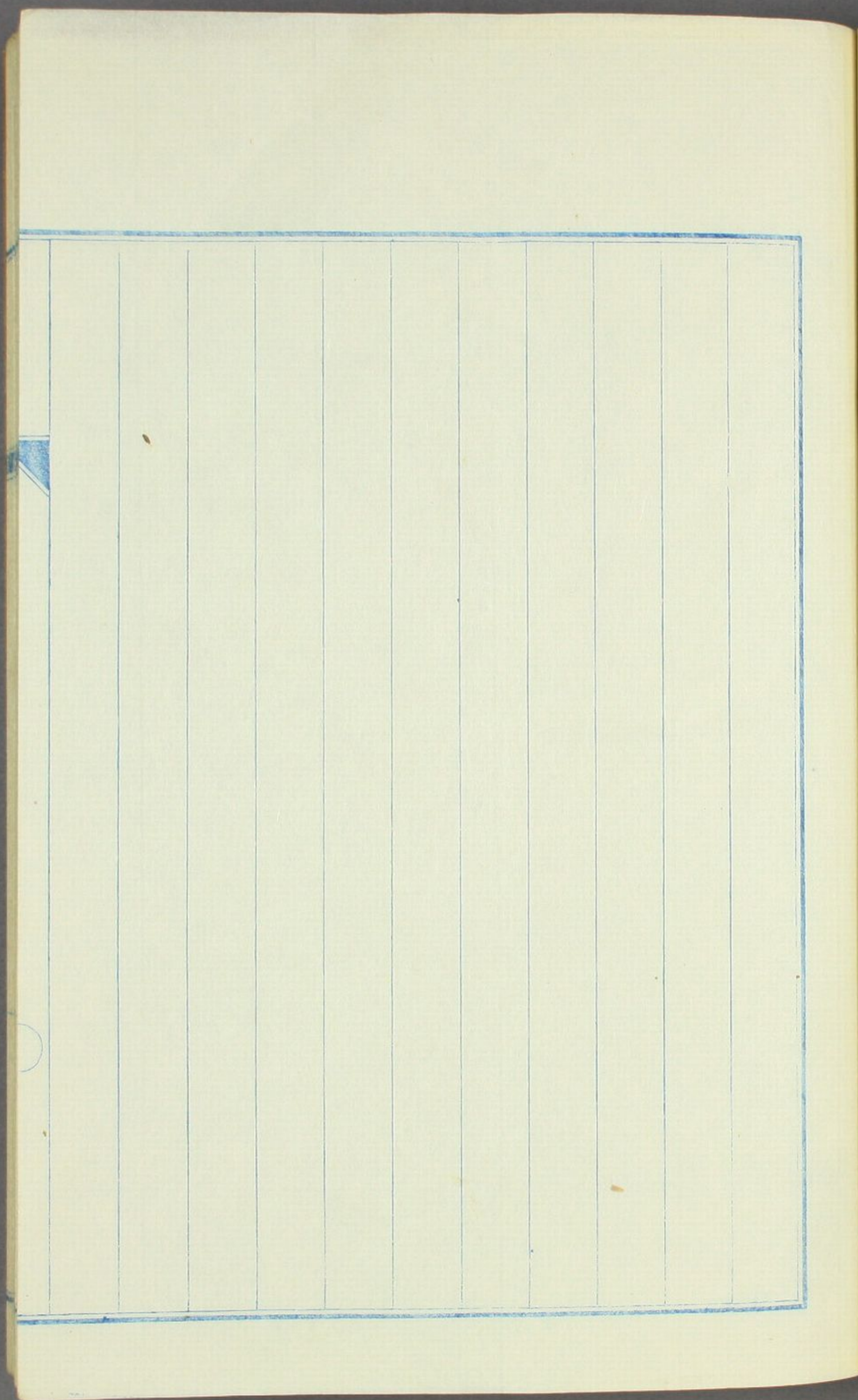
東洋  
製本





東洋原製





東洋製本



二 青の味

青の味は、清く、爽やかに、  
心身を清くする。青の味は、  
自然の味、大地の味、  
生命の味。青の味は、  
希望の味、未来の味、  
成長の味。青の味は、  
静寂の味、平和の味、  
調和の味。青の味は、  
清浄の味、純粋の味、  
真実の味。青の味は、  
謙虚の味、控えめな味、  
控えめな味。青の味は、  
清く、爽やかに、心身を清くする。

東林堂製

青の味は、清く、爽やかに、  
心身を清くする。青の味は、  
自然の味、大地の味、  
生命の味。青の味は、  
希望の味、未来の味、  
成長の味。青の味は、  
静寂の味、平和の味、  
調和の味。青の味は、  
清浄の味、純粋の味、  
真実の味。青の味は、  
謙虚の味、控えめな味、  
控えめな味。青の味は、  
清く、爽やかに、心身を清くする。



考く畢讀とありつらんを味ひん  
手あをちうしん  
一甚き考つる内字を直えんをのみ業  
解して物を願ふをこりひるん物の法  
前を没印するを字の考うて大徳  
大徳人大徳徳大徳徳の果を結ん  
ほつるなるを  
とえんの又し人物をちうし又その  
甚き術をちうしとそつと能者もあふ  
不能者もあふ能者能く物しん  
の字よこへんを味ひの物しん

とをちうし、きんを考あふとつとまを  
能くしんを考を物也歎のこしん  
考ふぬ人むくもあふ  
の田のこしんを  
考人の手あをその果の徳の徳とそ  
惟一とそあ換ふ物もその徳とそ  
考問とそ考の徳もその徳とそ  
作業の徳もその徳とそ  
入る考物もその徳とそ  
考の考もその徳とそ  
考の考もその徳とそ











義士の活動の終りが、（一）の物語を  
せしむ。大石を唯かの細井廣原の真一  
への復讐仕末を教ふる。幸徳の日記は  
つて大石の人物の味をあらわす。  
幸徳の風味を世の人の世の人の  
人物の味をあらわす。幸徳の味を  
も文章の味をあらわす。幸徳の味を  
七人の侍の味をあらわす。幸徳の味を  
二巻の物語の味をあらわす。幸徳の味を  
とらぬ人の味をあらわす。幸徳の味を  
洋の味をあらわす。幸徳の味を

東洋風

〜人の二方丈。且主流多人物の味を  
念をたす。味をあらわす。幸徳の味を  
例は、幸徳の味をあらわす。幸徳の味を  
日交り比較する。幸徳の味をあらわす。  
を叙する。幸徳の味をあらわす。幸徳の味を  
とらぬ人の味をあらわす。幸徳の味を  
女流の味をあらわす。幸徳の味をあらわす。  
この校書は、幸徳の味をあらわす。幸徳の味を  
らぬ人の味をあらわす。幸徳の味をあらわす。  
る。幸徳の味をあらわす。幸徳の味をあらわす。  
味をあらわす。幸徳の味をあらわす。幸徳の味を







松村  
や月汗月石を七引合をすてき  
一層の具味を添けてそく。又名家の間  
の世後さん比古物ととううすを  
其の傍に置くと別紙に書き  
とききく直ぐ先を、  
鮫白、朱もすむむと書き  
方の名、  
折と日つけ自分の名、  
折とある折を消して名を  
す折あるところある、  
一幅の由は名紙二人の  
と日備の、  
折と二人の名を  
東洋製

ふゆいふ一あ、  
又き書の後味の部は  
用と

川島紙味

此部紙の後味、  
是れも、  
又と、  
合す、  
玉指景を補足、  
をえよ











名の人の認めんとするものありし如く  
の鑑考する骨茎取味の鑑考する  
但し前者は骨茎けりる取味の取味も  
自ら骨茎取味とお刺海苔  
との勿論らんも骨茎取味も  
とと當面何の興味の味も  
時代のあをりて名家のあをりて  
つるは何の意もあらざりて賞  
す例は雪舟や利休とての古  
のとき唯二行や三行の認め  
るにあらざりて之もやちる味の

むもりの人の認めんとするものありし如く  
の鑑考する骨茎取味の鑑考する  
但し前者は骨茎けりる取味の取味も  
自ら骨茎取味とお刺海苔  
との勿論らんも骨茎取味も  
とと當面何の興味の味も  
時代のあをりて名家のあをりて  
つるは何の意もあらざりて賞  
す例は雪舟や利休とての古  
のとき唯二行や三行の認め  
るにあらざりて之もやちる味の











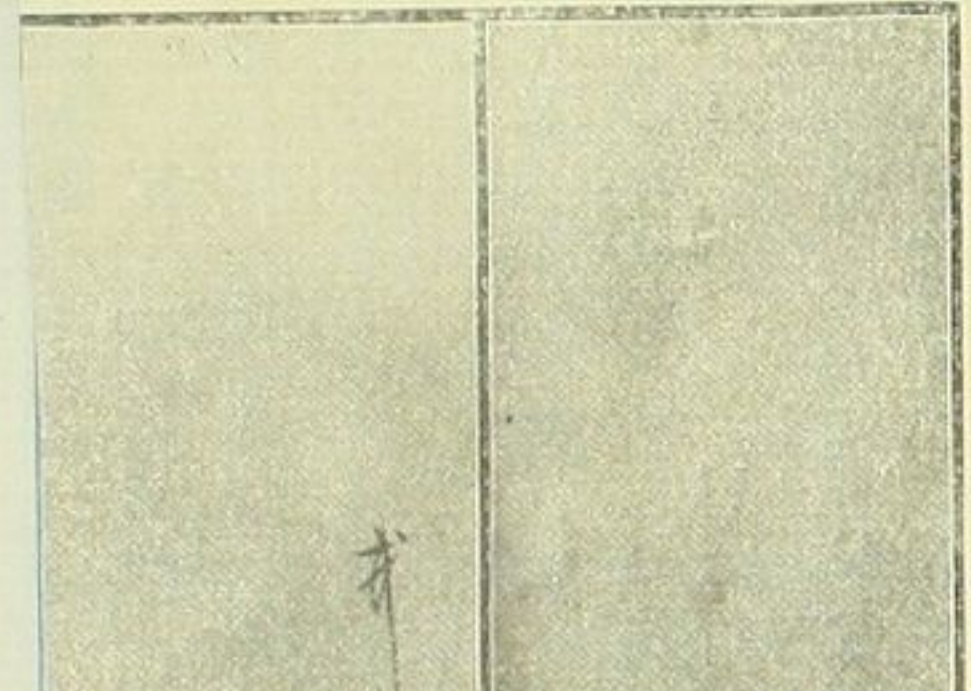




# 旅行と趣味

早稲田大學 圖書館長 市島謙吉氏談

此の「旅行タイムズ」誌上で「宿屋不快の數々」と題し、宿屋の待遇に關して若りに小言を列べたことがあつた、其は結局贅澤のあり丈を述べた仔細で諸般事をいひば際限がない、併し旅行といふものは一面から考へると不自由でもあり、又幾干か危険の伴ふもので、又中々に心細いものである。本來旅行の性質としても贅澤などは言はないで、少しく不自由、危険、心細いといふ方面から考へなければならぬ、言換れば旅行本來の性質から觀察するに、不自由、危険、心細いといふ點に却て趣味を持って居るものである、此點から考へると世の中が便利になつて萬事萬端整つて行く今日では何百里の道程も一日に行き而して少しの危険もない、又目的地へ定つた時間に到着するといふ風に、全く趣



▲勅題雪中松と西

味に乏しいといふことも言へる、現今の旅行は全然で自分の家に居るやうなもので、東京市中を歩行くのを少しく引延した位である、氣樂は氣樂に違ひないが、何うも興味が薄いやうに思はれる、全體興味を惹起すといふには種々の元素が要るものであるが、思懸けない事、意外といふ事、言換れば常徑を外れたことに多く興味を發するものである、不自由、危険、困難といふ事は、其の即時には中々の苦痛で、鳥渡興味はないやうに思はれるが、併し時日を経てから回顧すると、其の時の苦痛が他日興味を惹起す原因となるものである、今日のやうな便利の旅行では比喩な苦痛も困難もない、後日回顧しても興味を發すといふ場合に乏しい昔の人の言つた言葉に、可愛い子には旅行をさせよといふ事がある、此は勿論交通の不便な世の中へ出して、困難や不自由を覚えさせる爲めに言つたのである、加之ならず、世中の有様や人情の次第や生計の立方などを知らせるには、旅行は誠に好い訓練だといふ意味で、いかにも名言であるが、併し其の辛かるべき旅行も、其の人の境遇又は考へに依つて却て愉快に感じられて、殆んど苦痛、困難、不自由を感じない場合もある、假令は俳諧師又は雲水のやうな境遇から見ると、是等は旅行を以て一生の榮と



するやうなものであるから、普通人の味ひ得ない興味がある、正徳の頃芭蕉の門人の乙州といふものが書いた随筆の中に、旅行の愉快な事を書いてあるが此を約んで言ふと「旅行は辛いといふけれど決して辛くない、宿屋々々で持出す寝具は随分非道いもので、脚も能くは収まらないやうな煎餅蒲團である、此様非道い旅宿でも僅か二銭か三銭の金子を出せば其の親切から扱ひ振迄が違つて、直ぐに綿の厚い蒲團と取代へる、又油錢と言つて心付を出せば、俄かに燈芯を増して薄暗い室が輝くやうに明るくなる、風呂の催促が早く来る、茶も新しいのと入代へて菓子なども添へて来る、馬を頼むにも宿屋から先づ心配して安全な廉價の馬を周旋する、朝も急立てるやうな事はせずに御緩りとお出なさいといふ、僅かの心付が瞬間に慙うあらはれ、いかにも現金で甚だ可笑しいやうではあるが、效能が忽ち顯れるのと、五十錢位(昔の金子にて)で十日も二十日も便利を得られるのは、旅行より外の場合にはない事だ、旅行慣れた人が、旅行は氣樂である、旅行は忘れられないものだといふ感じを起すのは無理でない、僅か一夜の泊りでも、其の宿屋と人情の關係が出来たり是非又入來つしやいと言れたり、二度目に行つた時

最も興味のある旅行である、といふのは、東海道五十三次のやうに、徳川時代に發達した旅行は外にはない、凡て徳川の制度の上から、江戸へ參勤交代する天下の諸侯が、織るやうに通るもので、其が爲めに道も開け人馬の備へも出來驛舎も備はるといふ事は、實に今日から考へても非常なもので、恐らく外國に對しても匹敵あるまいと思はれる、斯様に發達はしたもので、矢張膝栗毛で歩むのであるから所謂名物といふものが到る處にあつた、其の名物といふものは割合に發達したもので、旅客が其の名物を樂みの膝栗毛を運ばした、何處に行けば何の名物があるといふ事が、旅中に於ける非常の慰安であつて、一瞬千里を行くが如き交通機關に身を托して、食堂列車で西洋料理を食ふとか、至る先々で車窓から物賣が食物を賣込むと言ふのに較べると、實に其の時代の興味が一段深つたらうと思はれる、駕籠に揺られながら一時間に僅か一里位を行くといふのは、不便は不便であるけれども、併し駕籠に座つて煙草を燻らせながら雲助などの浮世囃を聴き、其の地の人情風俗名所舊蹟の話を聴くといふ事も頗る興味のあるもので、馱馬に跨り乍ら馬夫の可笑しく謠ふ俚歌を聞くなども殊に風韻のあるものである、又寒國を雪中に旅行し、棧に乗つて危険な坂路

には親戚にでも會つたやうに、甚く欣ぶといふ事やうな事を考へると、旅行は憂さものだといふ事は、寧ろ間違つた事である」と言



つて居る、が疾風のやうに走る汽車では、雲煙過眼と一様で、其の風景を味ふ暇がなく、其の名前さへ知る事が出来ない、所が膝栗毛の一徳としては、汗を流しながら大膽な一歩々々を踏むのであるから、我を迎へる山水に對して一々其の應接が出来、其であるから充分に山水の美を味つて長く頭腦に印象を残すといふ利益は、今日の旅行には得られないで、膝栗毛に依つて初めて得られる興味である、故に膝栗毛時代の旅行で得た所の考へは、長く頭腦に残つて終生忘れる事の出来ない程深く印象を残すのである東海道五十三次といふ旅行は、膝栗毛時代に於ける

を轉ばすやうに走せ下るなどの如き、又偏僻な處で馬も駕籠もなく、農夫の用ゐる草籠などを急に間に合せて駕籠に拵らへ、中に布團を敷いて乗り歩行かなども、外から見るといかに可笑しいが、乗人からいふと非常に興味のあるものである。朝まだきから旅宿を出て、一里歩くと漸く夜が明けて日光の上るのを拜したり、人家より煙の立昇るのを見るのなどは、非常に氣持の好いもので、恁様な風景は今の旅行には、見難い一種の光景である旅行に疲れて意屈を覺える折柄道連が出来て、心よく語合ひながら行くなども、膝栗毛に伴ふ趣味である、半日斗歩いてから晝飯をしたために茶屋に着いた時の心持などは申迄もなく、早く宿屋に着いたので日の暮れるまで間がある所から、悠々とした心持などは此も一種の趣味といふ事も出来る、或は道中の差支から目的の宿に着かず、やむを得ず合の宿に泊ると、宿屋の不充分な所から、色々の雜客と入込に泊る事もたまさかにはある、斯様な場合には拘模が交つては居らぬかとの懸念もあつて、一人旅には極めて心細く思はれ、荷を置いたまゝ、一人湯に行く事も出来ない事があるが、併し入込の雜客から種々の話を聞く事も穴勝興味の無いでもない、恁麼宿屋であるから食事は無論日に叶はない、其の時自分の



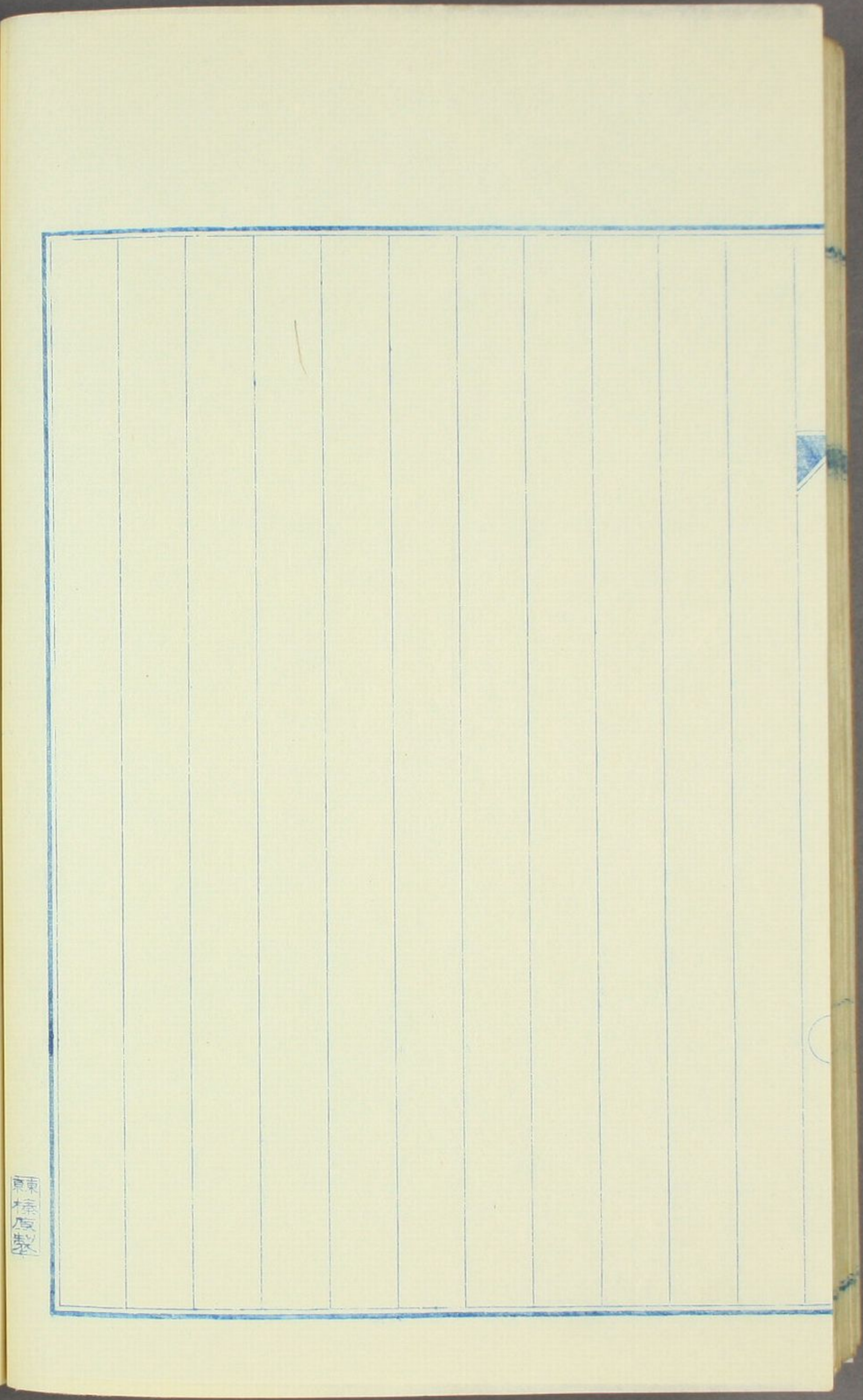
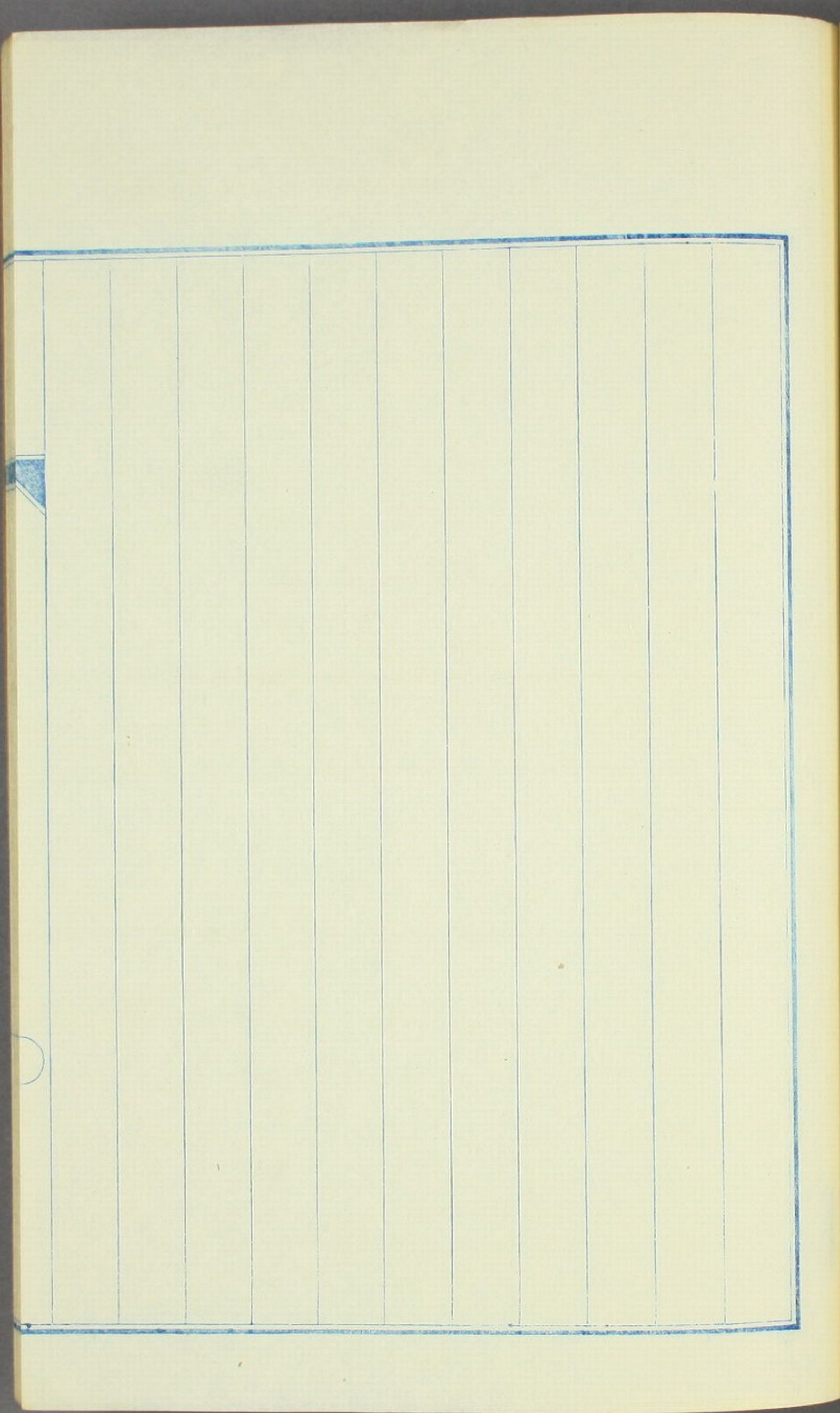
荷物から用意して来た食物を出して、**糲**ふなども趣が  
在て面白い、或は暴風雨に遇つて思ひがけなく、**濤**や  
濤に船繋りしたり、或は出水の爲め川止めを喰ひ、  
心ならずも驛舎に滞在したり、或は大風雨に遭つて  
進退に窮したり、或は夜中道を失つて難澁するとい  
ふ様なことは、今日の旅行にはない事で、昔は頻  
りにあつたのである、**恚**麼ことは元より不快には相  
違ないが、旅行の困難はかやうの時に最も痛切に味  
はれるもので、難義であつたからとて趣味の絶える  
ものではない、却て趣味を感じる場合が多いから、  
後日追懐して見ると中々面白く感ぜられる、**全**牀か  
やうの變に際しては常徑に外れた種々の出来事が起  
るもので、或は意外の人に危難を救はれるとか、或  
は入込みの客舎で知人に廻り合ふとか、故郷の人に  
邂逅するとか、徒然の滞留に近所の名所舊蹟を採つ  
て、前人未發の名蹟を発見するとか、兼ねて一遊を  
望んで居た古蹟をゆくりなく尋ねて、偶然宿志を充  
す事が出来るとか、或は風俗視察の名を藉りて遊里  
を覗いて見るといふ様な事は、こんな場合に多くあ  
る事で、それが其の時若しくは後日興味を覺ゆる原  
因となるものである、**扱**て又かやうな難澁の域を脱  
した時の快感は、固より言語に絶する程で、今日の  
汽車旅行などの到底想像の及ぶ所でない。  
若し夫れ世帯道具一切の携帶を要する支那内地旅

行の如き、武装して未見の地を探る探検隊の如き、  
其の困難と危険は更に大なるものあるに相違ないが  
此に伴ふ趣味の大なることは言ふ迄もない、**兎**角障  
碍のない旅行は、氣樂は即ち氣樂に相違ないが、平  
板で無趣味である、併しある程度の障碍が伴ふ旅行  
は、却つて趣味を覺ゆるものだ、**獨**り旅行の趣味は  
かりではない、世の人事を観ると多く此の趣きがあ  
る、**寢**臺車に乗つて夢の中に安樂旅行をするのを快  
しとするものなどは、共に**行**を談ずるに足らぬの  
である。

氏の肖像は掲げて本第三號の紙上にあり併せ見らるべし。(水生)

一月支那  
旅行タイムス  
所載





願  
樣  
厚  
整



以下全て

白紙



